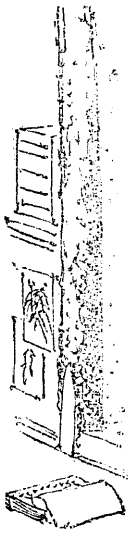


常に乳母車に乗せられ、體を暖く包まれて、毎日二回宛睡眠の爲めに玄關の外に寝かされて居たところか、間もなく大層丈夫な體となりました。無論上には風のあたらないやうに軽い被覆をせられて居ました。

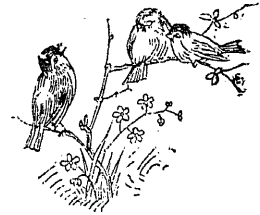
牛乳で育てられる嬰兒が秘結する事がある場合には其乳に食鹽を一滴み入れて飲ますれば往々全治する事があります。

嬰兒には何時も充分暖かなやうに着せて置かねばなりませぬ。さうして着せ過ぎてはいけない。何時も其着物は能く乾いて着心よさやうにして置かねばなりません。また食物を適度に與へ、其心身を攪亂しないやうにし、其睡眠を妨げないやうにせねばなりません。斯くしてこそ其報いとして小兒の心も健康も共に勝れて日増しに幸福と愉快を増し加へらるゝことが出来ます。



婦人と家政

栗竹孝太郎



男女兩性は互に異なる特長と天職とを有して居り又育すべきであるは云ふまでもない。此點に就いて希臘の哲學者プラトンの想像説は、男女兩性調和の必要を最も能く説明せる話と見られる。其説に依れば原始の時に於ける人類は、男子と女子とは分たれずして、男性女性の兩部共に一人に合體し、一人にて男兼女たり、夫兼婦たるものなりしが、斯く兩部が混和結合して一體を成せるが爲に、兩性の一致完全にして、従つて人類は莫大なる幸

福を享け、餘りに幸福なりしより傲慢無禮となり、終に諸神の命を奉せしめて、之に對し叛逆するに至れり。是に於てジュピター神は人類の大膽なるを罰せんとしたるが、其方法は、男女兩性の合體を解きて互に離別せしむるに如かずと爲し、即ち兩性の完全なる結合は神罰を蒙りて破られ、茲に始めて男女は別人として生存する事となれり。然るに人類は分離後に於ても、戀々として合體の當時に享けたる幸福を忘るゝ能はず、引離されたる各半部は、互に他の半部を求めて止む時なく、幸に適良なる半部と相逢ふときは、至大の同好同情を以て、何時までも琴瑟の和を保つべきなれども、半部の選擇を誤るときは、一旦の結合も忽ち離別となり、更に適良なる他の半部を搜索するの必要を生ずるに至ると云ふてある。是は男女の起源、及び婚姻に關する哲學者の説であるが、吾人は之を以て男女分業協力の必要を説明せる言葉として大に趣味ありと考ふるのである。

凡そ社會的の經營は、分業協力の結果ならざるはなきも、殊に男女の分業協力は最も自然にして且

つ最も緊要なるものである。若し男子が女化し、又は女子が男化すれば、其分業協力の必要は薄弱となり、之より生ずる利益も僅少となるべく、之に反して男女が互に益々其特長を發達せしむれば、其分業協力は益々缺くべからざるものとなり、之より生ずる利益は愈々偉大となり、男女を綜合せる人類は益々完全とならうと思ふ。而して男女の分業協力が如何に行はるゝかは、古今東西、時と所とに従ひ、又社會の階級に従ひ、互に同じからざるは、勿論なれども、要するに、男は外を營み、女は内を整ふるを以て分業の基礎とし、此分業十分に行はるゝを以て文明の状態と爲すべきである。故に家庭と稱する小帝國に於ける財政、衛生、教育、警察を施行し、常に平和ならしめ、快樂ならしめ、健康ならしめ、規律あらしむるは、主として婦人の任すべき天職にして、婦人をして此天職を盡さしめんには、資金と時間とが無くてはならぬことは論を俟たない。

先づ時間に就いて一言すれば、交際の時間を利し節約するを以て甚だ緊要と考へる。時を親戚

又(また)は朋友(とも)と相會(あひまひ)して、談話(だんわ)、智識(ちしき)、經驗(けいけん)を交換(かうかん)し、以(もつ)て益々(ますます)懇親(こんしん)を厚(あつ)くするは、互(たがひ)に幸福(きふく)を増加(ぞうか)する所以(ゆゑ)にて、斯(か)かる交際(かうさい)を缺(か)かば、人間(にんげん)の人間(にんげん)たるかひ無しともいふべし。而(しか)して之(これ)を行(な)ふには、雙方(たがひ)に差支(さしつか)えなきやう豫(あらか)じめ日時(にちじ)を約(やく)し、相會(あひまひ)しては、十分に歡(くわん)を盡(つく)し、遺憾(いへん)なく和樂(わがく)の目的(もく)を達(た)しなればならぬ。其他(そなた)臨時(りんじ)の往來(わうらい)は、必ず要務(ようむ)要談(ようだん)ある場合に限り、既に要務(ようむ)要談(ようだん)を了(お)らば、訪客(ほうかく)は直(ただ)ちに去(い)るべく、主人(しゅじん)は安(やす)りに之(これ)を引留(ひきど)むべきでない。斯(か)くて交際(かうさい)上の時間(じかん)を飽(あ)くまで利用(りよう)すると共に飽(あ)くまで節約(せつやく)するは、最も注意(ちゅうい)して務(つと)むべき事(こと)であらう。次に頗(さぶ)る困難(こんなん)なる問題(もんだい)は女子(こじ)の職業(しごく)と家庭(かてい)との關係(けんがひ)である。吾人(われん)は茲(こゝ)に女子(こじ)が高等(こうとう)なる學問(がくもん)藝術(ぎゆつ)を研修(けんしゆ)する場合は云(い)ふにわらずして、生計(せいけい)上の必要(ひつや)より、工場(こうじやう)其他(そなた)の勞働(らうどう)に報(むか)へる場合(ばあひ)を云(い)ふのである。未婚(むけん)の女子(こじ)にして此境(このやうな)遇(あひまひ)に在(あ)れば、他日(たじつ)一家(いっか)の主婦(しゆふ)たるべき良質(りやうしつ)を損(こ)し、邪惡(じあく)の道(みち)に陥(おち)る危險(けんけん)が甚(さ)だ尠(すくな)くない。既婚(けいこん)の女子(こじ)にして此境(このやうな)遇(あひまひ)に在(あ)れば、家庭(かてい)の整理(せいり)及び(及び)子(こ)の教養(けうやう)に充(み)つべき時間(じかん)の大半(たいはん)を犠牲(ぎせい)としなければならぬ。是(こゝ)は各

國(こく)共に、經濟(けいぎ)上(じやう)、社會(しやかい)上(じやう)、道德(たうてき)上の重大(ぢゆうだい)問題(もんだい)と爲(な)す所(ところ)であつて、雷(らい)に現代(げんたい)のみならず、遠(とほ)く次代(じだい)子孫(しよん)の禍福(くわふく)にも響(こた)ひする次第(じだい)である。故(ゆゑ)に女子(こじ)が勞動(らうどう)に従事(じゆんじ)するは止(とど)むを得(え)ずとするも、成(な)るべく其方法(そのほうほう)を改善(かいぜん)し、其弊害(そのへいがい)を矯正(きやうせい)することは極めて緊要(きんやう)であつて、學者(がくしや)や政治家(せいじか)が此問題(このもんだい)の解決(けつげつ)に心力(しんりき)を盡(つく)すべきは勿論(もちろん)であるが、吾人(われん)は婦人界(ふにんかい)の有識者(うしきしや)が大(おほ)に此問題(このもんだい)に注意(ちゅうい)あらんを深く希望(きぼう)するのである。

又(また)家庭(かてい)の行政費(ぎやうせい)を供給(きよきやう)するは専(ま)ら男子(なんし)の任務(にんむ)とする所(ところ)である。故(ゆゑ)に男子(なんし)は、家長(かてい)とし、資金(しんきん)供給者(きよきやうしや)として、自然(じぜん)家政(かてい)に對(たい)し、命令(めいれい)、認可(にんか)、監督(かんとく)の權(けん)を有(あ)るのである。然(しか)れども實際(じつざい)は、殆(たいてい)ど此權(このけん)の施行(しやうしん)を要(え)せざる程(ほど)にあらざれば、家政(かてい)は美(うつく)なりと云(い)ふことが出來(き)ぬ。若(し)し男子(なんし)にして家政(かてい)に對(たい)し細密(さいみつ)の干渉(かんせふ)を加(く)ふるあらんか、こは、適者(てきしや)に任(まか)ずる能(あた)はざるの罪(つみ)、夫(おと)にありとするも、將(まさ)た家政(かてい)を料理(りやうり)する能(あた)はざるの咎(とが)、婦(め)にありとするも、何(なん)れにしても到底(たうてい)圓滿(えんまん)なる家庭(かてい)の幸福(きふく)を擧(あ)ぐる能(あた)はざるべしと思(おも)ふ。故(ゆゑ)に双方(たがひ)共に最も戒(いま)めて之(これ)を矯正(きやうせい)す

る必要である。若し婦にして家庭の宰相たるに適せば、夫は内顧する所なく、一に自己の事業に専心努力することが出来る。徒らに無用の干渉を試むるは、男女の特長に従ひ、互に業を分ち力を協はす所以であるまい。而して家庭の經濟を正すには、明瞭なる家庭簿記を以てするより善きはなく、決して一時の心算として紙片等に書附くる如き事を爲べからず、必ず適當なる帳簿を備へ、一切の收支及び其摘要を之に記入すべきである。凡そ如何なる事件も、收支に關聯せざるものなければ、此の帳簿を保存せば、最も貴重なる家庭歴史となり、且つ物價の高低、其他生活状態の變遷に關し、經濟上、社會上の研究に甚だ有益なる材料を供給するを得るは、吾人の信じて疑はざる所である。若し主婦にして一應經濟學の理をも調べ、家庭經濟を行ふに當り、常に理論と實際とを對照せば、最も妙味多かるべしと思ふ。又家庭經濟に於ても、年々收支大體の豫算を立つること極めて緊要にて、豫算超過の支出は固く之を避け、毎年必ず多少の剩餘を蓄積する事としたなら

ば、家庭は歳を逐うて益々富裕となり、延いて國家富強の基となるに相違ない。ジエビター神が一體なりし男女を解きて兩體の男女と爲したるも、人類の不幸なるに以て必ずしも然らずである。此分離の爲に、男女何れも十分に其特長を發揮することが出来る。故に互に良匹好偶を得て結合するときは、一層完全なる人類を形成し得るに相違ない。而して其分業協力の結果は、求めずして自ら生じ來るべしと信ずる。

